

環境と人間 I

森の資源と暮らし

日時：平成20年7月26日（土） 10:00～15:00

講師：野中 健一（立教大学大学院文学研究科教授）

概況



■自然と資源

資源は、人の暮らし(社会・文化・風土)と密接なつながりがあり、人は自然に主体的に関わり、自然を自ら取り込むことで資源にしています。人間にとって「自然」から「資源」へ変化するプロセスは、まずそこに自然(動植物など)が生息していること、次に認識され、そして価値付けされ、知識・技術があつて資源として利用されています。「資源」は、物質的資源と精神的資源の2つに分けることができ、物として利用する、場所として利用する、愛でる、観察する、神聖視するなど多岐に渡ります。

■森との関わり合い

「森」を構成するものは様々で昆虫もその中の一つです。ハチの子をはじめとして中部地方山間部は日本でも昆虫食の最たる地域で、巧みな方法で捕獲をしたり、また調理方法も多岐に渡っています。今日は「昆虫食」を通して森と人とのつながりについて紹介していきます。

(豊田市石野地蜂クラブの方々に来ていただいて、海上の森でクロスズメバチの巣を見つける現地体験が行われました。)

■虫は森の食べ物

例えば、岐阜県恵那市串原や奥三河の名倉ではクロスズメバチの「ハチの子(ヘボ)」を使った村おこしがおこなわれています。ヘボ祭りとして、育てた巣の大きさを競ったり、ヘボを使った五平餅を振舞ったりなどのイベントをされており大盛況のようです。

ヘボ食が地域の誇りとなっており、ヘボを保全する活動も行われています。

海外を見てみるとアフリカや東南アジアでも昆虫食は身近なものです。ガの幼虫やバッタ、アリ、ハチ、セミをはじめカメムシも捕獲し食用としています。ラオスでは、食用としているコオロギやツムギアリは林縁に棲む「キワ」のものであり、森と田んぼの境によく生息しています。つまり、人が手を入れて森を田んぼにすることで、それらの虫の生息場所が広がり、採集できる虫も多くなります。

このように、「昆虫食」は人の暮らしと深い関わりを持っています。食物としての価値、昆虫を用いる文化が認識されることで、「環境」としての森や虫を理解することになり、それが森の多様性・つながりを理解することになります。「資源」や「開発」は、必ずしも自然と対立するものではなく、生命の自然・場所としての自然は、人の暮らしがあつてこそ理解できることがあり、お互いの尊重と共感を軸に「節度」を持って利用していくことが大事なことはないでしょうか。